

わたしが統一教会に通っていた頃

山田まさ子

わたしが統一教会の門をくぐったのは、特別な理由があるわけではなかった。色白の女性が寒い日に薄いカーディガンを羽織ったままで話しかけてきて、寒そうな肩を見て、話だけでも聞いてみようと思ったからだ。だが、そのことを書く前に二〇二二年に起こったあの日の事について触れておかねばならない。

今、手元にある京都新聞号外には、二〇二二年七月八日付黒ベタ枠に白ヌキ文字で「安倍元首相銃撃される」とあり、小見出しには、「心肺停止か、銃撃で」「奈良で演説中、容疑41歳男逮捕」とある。

この日、わたしは銃撃直後の現場に駆けつけた。友人と一緒に京都へ遊びに行くつもりであったが電車の中で、スマホに速報が入り、安倍元首相が銃撃されたという。奈良市の近鉄大和西大寺駅前と聞いて友人は渋った。今乗っている京都市の電車とは全く違うから乗り換えが大変だと

言う。わたしはここで殺し文句を言った。「今起こっているこの事件は歴史に残るような大変なこと。だから現場を見ておかねば」

友人は老いてはいたが元新聞記者であり、現場を見なければという本能が残存しており、歴史的などという言葉にも弱かった。

「せやなあ、これは今じゃないと見られへん」

我々は二つの駅を乗り換えて事件発生から二時間後には近鉄大和西大寺駅前にいた。列車は降りる人でごったがえしていた。駅は二階建てで上階はガラス窓になっていて、下の選挙演説があつた場所を見下ろすことができる。まだ首相の生死はわからなかったが、記事に慣れた友人は心肺停止と発表されたらもうおしまいやという。二階のガラス窓から覗いているお年寄り連中は物見高く、一人が得意げにスマホを翳して見せた。「これに速報が入ったからわたしはすぐに駆けつけたんや」「俺はテレビを見てきた」三人



目も興奮した顔つきで、何かしら面白いショーのように現場を眺めては語り合うのだった。

駅の周りも見物人が押し寄せていた。選挙カーのあった辺りまで近づくと青いビニールが一面に敷かれていて、捜査員たちが屈み込み、何かを探していた。銃弾を探してい



たということだ。人々は黄色いテープギリギリまで囲んでいて、スマホで写真を撮っている。テレビ局がマイクを向けたりもしていた。買い物帰りの奥さんが何があっただんですかと聞いてきたので、説明するとヘーといったきり、びっくりにしたような顔をしている。後に首相が亡くなっ

事件現場写真は筆者撮影

ら、沈痛な面持ちの人たちがやってきて雰囲気为重苦しくなるのだが、このときはまだ人々がただもの珍しげにそして何が何だかわからないといった面持ちで眺めていた。

どこかの選挙演説で事件の見解が聞けるかもしれないと再度京都に向かった。地下鉄駅構内では「ごーがい、ごーがい」と叫ぶ声がして、京都新聞号外を人々が取っていく。駅内でもコンビニでも道端でも熱心に立ったまま紙面を覗き込んでいる。こんなふうに人が新聞を覗き込んでいる姿はいつの時代に見ただろう。選挙カーは一台もいなかった。

天王寺で辻元清美の演説ならやっているかもしれないと大阪に戻ってみた。だが自民党以外も選挙演説を中止していた。諸派の選挙カーはマイクを握っていた。押越清悦という人物が大声で、この度の首相元首相の銃撃はテロであり、背後に中国の影があると演説をしていた。数人ほどが熱心に聞いていた。デマや憶測は乱れ飛んでいた。いつだったかカフェでおばちゃんたちが、犯人はプロの狙撃手か別にいる、銃撃の弾が消えたのがその証拠などと訳知り顔で話をしていた。

山上徹也被告は、二〇二三年一月に起訴された。動機は母親が旧統一教会に多額の献金をしていたため、教会と近い関係にある安倍元首相を狙ったという。元首相が父親の秘書をしていた時代に山口で話をしている人が、安倍さん

は気さくな人物だったと振り返っていた。とても出世するようには見えなかったそうだ。もちろん政治の頂点に出世しなければ、安倍元首相は無事でいられた。だが相手が代わるだけだ。若い頃にわたしは選挙カーのウグイス嬢をしていたので、統一教会の人が手伝いに来ているのを日常としてみなしていた。お札の飛び交う金権選挙をみてきた者としては、突如沸き起こった安倍批判も、自分たちは関わりないと主張する自民党議員も、なにを今さらという思いであった。

二十三歳くらいのとき、統一教会に通い始めた。ここではすぐ上で指導してくれる人のことを「姉妹」と呼ぶのだが、この呼び名も一人っ子で元鍵っ子には夢のようだった。被差別出身や母が精神病院にいたことを隠さねばならなかった身には憧れた物語の中にいるようで嬉しかった。赤い背広の似合う父は「色男金と力は」と自ら囁くようなノーテンキであり、ギャンブルの借金のせいで引越せねばならず、親身になって話をきいてくれる姉さんが出来たことは僥倖^{あやふし}であった。

統一教会の講義は大変興味深いものだった。というのも、わたしは中学時代にエホバの証人に通っていた。毎週日曜日昼ご飯に配給してくれるカレーがめあてだった。アルミ鍋に入れられたカレーは薄い汁だったが、それでもホーム

レスは講義を聞きさえすれば、カレーが食べられるのだからとありがたがっていた。

エホバの証人の教えと、統一教会の教えでは、同じ聖書が下敷きになっているとはとても思えないほど違っていた。統一教会のものはアダムとイブの話の解釈からして全く違っていて斬新に思えた。新しい知識に触れて、わたしは興奮したのだが、一方で姉妹のような純真な信仰心は持っていなかった。

姉妹は初めてわたしがここに来た時に、ピアノを弾いてくれた。讚美歌を知っているなら、どれでも弾くよと言うので、わたしは「主の民と喜べ、みくに近し シオンにキリストたちみな喜ぶ」と歌い始めた。すると彼女は全身で笑い出した。これはよその教会の讚美歌だよ、これしかまだ知らないと答えると、じゃあそれ歌ってしまおうかと言ってそのまま弾いてくれた。彼女はまだ洗脳されきっているわけではないと思った。筋金入りの信者なら他宗派の讚美歌は「悪魔の歌」になる。エホバの証人でも他宗教の者は最後の日に地獄に堕ちると教えられた。統一教会でも彼女の指導者にあたる男性の指導者はそう言っていた。

だが統一教会といえども四十数年前は人によって違うこともあった。東京から来たさらに上の階級にいる人は、講演会で他宗教を罵ったりしなかった。他の神仏を折ついても正しきものは真実の神につながるのだと教えた。聖書

からの引用だろう。その時にやはり上層部になるとあからさまによその宗教の悪口は言わないなど感じたから覚えていた。後にわたしが真言宗の信者になったときに聞かされた私の講話も、そのまま出典を伏せたまま使われていた。

我が姉妹は要領が悪いために全く出世とは程遠かった。干物だとか雑巾だとかを売りつけることが出来た。よその姉妹は高価な花瓶や印鑑を売り、指導者の覚えめでたかったが、彼女はその辺はてんでダメだった。わたしに何かを売ろうとしたこともなく、他の信者が献金を言いかけると「この人は無理だから」と止めていた。

濃紺のスカートに首元までとめた白いベラベラのブラウス、髪飾りひとつない彼女には、わたしには青春がないように思えた。脱会出来て、姉妹と二人町にアイスクリームを食べに行けたらどんなにいいだろう。この統一教会にずっといて大丈夫かと聞くと、何か雑誌で読んだのですかとひどく悲しげに聞き返した。彼女を傷つけたくなかったのだ、もうその話は口にはしなかった。週刊誌で合同結婚式が話題となっていた頃だった。結婚は決められた人とするのだと答えていた。まだ二十五歳にもなっていない。うら若い彼女はあまりにもおとなしく儂はかまげに見えた。どうしてここに入ってきたのかと尋ねると、松山に住んでいた頃に失恋したのだと答えた。相手の男性を責めせず、家には自分の居場所がないと言う。

だがここは居場所だったろうか。彼女の指導者はひどく芝居がかった男で、わたしが久しぶりに訪れると、あそこでああなたの姉妹が祈っていますと言つて指差す。その先には彼女が素足で床に跪ひざまずいて祈っている姿があった「あなたがあんまり来ないので、姉妹は悲しんで自分を責め、毎日祈っているのです」

「この方が来ないのは姉妹の導きが足りないせい」と大声で叱りつけることもあった。

一年後彼女は、転勤となった。わたしは船着き場に見送りに行き、小さな七宝焼きのペンダントをプレゼントした。飾り物はつけてはいけない規則になっていたけれど、若い女の人のので一つくらいいいだろうと思った。別の姉妹がジトツとした眼でペンダントを睨にらんでいた。でも姉妹は教義のいう虚飾品ではなく、わたしの気持ちとしてとらえていた。よその教会の讃美歌をこっそり弾いてくれたときと同じ、やさしい笑顔を浮かべた、小さな街灯りの絵のついたペンダントを大事そうに手に握り締めていてくれた。姉妹からわたしに贈られたのは一枚の手作りのしおりで、聖書の一節が細い文字で書かれていた。

紙テープ一つない船での見送りだった。大阪から韓国へ行くので、もう会えないとわかっていた。当時脱会を勧めなかったのは、あれほど純粋な人が普通の世間で生きていけるとは思えなかったからだ。まるでアンドレ・ジイドの

「狭き門」に出てくるアリサだった。このまま教会の中で守って貰つて生きて行けたらと思つたのだ。

けれども、この見通しは間違つていたのかもしれない。その後わたしは民生委員として千葉の松戸で三年間過ごし、心が、信心によつて一文無しになつて流れてきた人たちをみる事があった。こんなところに来るような人じゃないのにと役所の人がつぶやくような人もいた。心を病んだり、認知症になつたりして宗教団体にお金を持つていかれて、老朽化団地に流れてきている人たちであつた。こんなことは統一教会だけではなかった。

教会に裏切られたら、姉妹は生きていけない。一心に神を信じていた。内部の虐めすら、あの人のとつては神の試練だった。教義を伝えてくれた夜、わたしは暗い夜空の寒々とした欠けた月を見上げた。神の教え、あの人はそれが正しいと思ひ、わたしに伝えてくれた。姉妹が出来た喜び、一人でないという何かに抱かれていゝような安心感、他人からは統一教会に通つていた頃は、不毛な無意味な時間に見える。だがわたしにとっては、不毛でも無意味でもなかった。友達が差し出してくれた温もりだった。

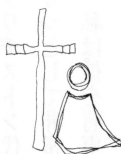
号外を握り締めたまま、わたしは思った。あの人はこのニュースをどう思うだろう。以前のようにでたらめが書かれていゝと思つて聞かないふりをするだろうか。あの純粋さが傷つけられていないだろうか。

受賞の言葉

山田まさ子

作中の姉妹、この作品はあなたへの届くことのないお手紙です。韓国でも日本でもどうかお元気でありますように。掲載には感謝の気持ちでいっぱいです。いつもわたしの作品を良いね、良いねと何十年も、94歳の今日も褒め続けて下さる田中単之先生、先生のリップサービスにどれだけ励まされたことでしょう。

選んで下さった審査員の先生方、編集部の皆様、誠にありがとうございます。恩師田中老譲りの文学雀の踊りで頑張ります。



山田まさ子

やまだ まさこ

1957年生まれ、土佐育ち

1994法政大学通信教育部卒

大阪文学学校修了生

高知県芸術祭文芸賞

大原富枝文学賞

第6回法政大学懸賞論文賞『法政』1994年2月号掲載

第12回JTB旅行記賞佳作『旅』2004年1月号掲載



破壊者たち

五十嵐勉



アジアカルチャー

1700円

御注文はアジア文化社まで

ユダヤ難民を救った男

木内是壽

樋口季一郎・伝



アジアカルチャー

御注文はアジア文化社まで